

第5回 抗がん剤治療に伴う 皮膚障害のマネジメント

開催日/会場：2010年11月27日(土)/ロート製薬株式会社東京支社会議室(東京・港区)

協賛：ロート製薬株式会社

講師：浅子恵利先生(千葉県がんセンター薬剤部上席専門員、がん薬物療法認定薬剤師)

市川智里先生(独立行政法人国立がん研究センター東病院通院治療センター副看護師長、
がん看護専門看護師)

座長：田中登美先生(大阪府立大学看護学部講師 がん専門看護師、NPO法人キャンサーリボンズ委員)

講演 「抗がん剤治療に伴う皮膚障害のマネジメント - 抗がん剤ごとの皮膚障害と対処法 - 」

浅子恵利先生(千葉県がんセンター薬剤部上席専門員、がん薬物療法認定薬剤師)

皮膚の構造と役割を最初にご説明いただいたうえで、手足症候群とEGFR阻害薬による皮膚障害について、詳しくお話いただきました。

皮膚障害の重症度と抗がん剤の治療効果は関連する場合が多いものの皮膚障害は患者さんのQOLを大きく損ないます。そのため保湿を中心とした予防的スキンケアが非常に重要であるとして、治療開始時からの患者さんへの説明内容や実際に行われている予防的処方について詳細な情報提供をいただきました。



また、手足症候群や皮膚障害が発現した場合のグレード別の対処法について、ステロイドの身体の部位別使用方法も含めた治療法から抗がん剤の減量・休薬まで、アルゴリズムをご提示いただきました。

さらに、千葉県がんセンターで成果をあげている、患者さんへの情報提供や院内連携、院外の保険薬局との連携のための工夫 - 指導箋やお薬手帳用のシールなどのツール - をお示しいただいたことで、参加者にとって、より有意義な内容になったと考えております。

講演 がん化学療法に伴う皮膚症状アセスメントと看護実践

市川智里先生(国立がん研究センター東病院通院治療センター副看護師長、がん看護専門看護師)



皮膚の構造と障害が起きるメカニズムの説明のあと、EGFR阻害薬による皮膚障害、手足症候群の症状が出た際の看護ケアについて、がん研究センター東病院での実践内容をお話いただきました。

同時に、患者さんが治療を完遂できるよう、治療が始まった時点で、症状が出る前から予防的にスキンケアすることが大切であること、具体的には、保清、保湿、UVなど外的刺激を最小限にすること、患者さんの年齢や家族構成、性別など個々の患者さんに合わせた生活指導が重要であることを、具体的な個別の事例(男性へのヒゲそりの指導、ご高齢の女性への泡洗顔の指導など)をいくつか示しながらご説明いただきました。その際、患者さんが手に入れやすい市販のスキンケア製品や、患者さんが愛用していらっしゃるものを上手に使うことについてのご提案がありました。

しかし、スキンケアをしても皮膚障害のグレードが上がり治療中断を与儀なくされる患者さんもいらっしゃいます。そのようなとき、看護師が「治療を続けたい」患者さんをどう精神的にサポートするかを参加者とともに考える場面もありました。「患者さんの気持ちをまず受け止める」「患者さんの生活背景を理解した上で一緒に考える」ことの大切さを再認識させていただける講義であったと思います。

このほか協賛社のロート製薬株式会社メディカルスキンケアグループの末元晶子氏から、アトピーの方の皮膚症状での臨床データを示しながら、予防的なスキンケアの有効性に関するプレゼンテーションがございました。